わが師わが友(その1)

—北 欧 10 人—

岡 村 誠 三*

(1)

今までにいろいろと教えてもらった人々に、2, 3 行ずつ登場を願ひ、ただし簡単化のために呼びすてにさせていたが、その研究室なりその地方のふんい気をぼんやりとでも浮きぼりして見たいと思う。この次に会ったときに聞いただして見たいと考えるような細かい点もあり、また中には今後の国際協力にとって大事だと自分なりに考えている大きい問題点もある。1 回に 10 人ぐらいずつとして 5 回か 10 回も続けば、もっとも紙面がもったいない気もするが、合計 50 人から 100 人にもなり、それなりに……と自分勝手なことも考えている。

さて今回は Stockholm 在住の Rånby, Westermarck および Brohult の 3 人、東北地方の Claesson, Kinell と Gilbro, 南方スコーナ地方の Adler, Sunner および Flodin の 3 人、それにベルギーから Smets に加わってもらって北欧 10 人とした。

(2)

まず Rånby は周知のとおり大の親日家で Institute of Polymer Technology, Royal Institute of Technology に所属し、昨年まで Faculty の Dean を勤めた。数年前から Polymer Day なる秋の学会を始め、特別講演に外国人を招待している。類似のものにカナダの Polymer Forum や、オーストラリアの Polymer Meeting があり、小規模ながらそれぞれ年会の役目を果している。スウェーデンの高分子事情はカナダやオーストラリアに似たところがある。来年になると研究所の建物も増築される由。Rånby 研の産業界との協力はよい意味でうまく行っているらしい。政府筋との関係も深く、たとえば STU (State Board of Technical Development) と協力、プラスチックの廃棄などにも研究の手を伸ばしている。ESR による transient radical の研究は、北大の吉田宏助教との協同研究に始まり、倉レの高倉孝一博士や 昭和高分子の土井幸夫氏、東レの泉善二博士と引き継がれて今日に発展している。とくに外

国人研究者の滞在も多く、現在 IUPAC の高分子部会のスウェーデン代表を勤めている。1966 年の日本での国際シンポジウム出席印象記は、かの地の新聞にも採り上げられ、かなりの評判であったらしい。この 2 月東京で Swedish Technical Week の計画があり、開会特別講演者として再度来日が予定されている。

(3)

Westermarck は Department of Chemistry, Royal Institute of Technology で物理化学を担当し Rånby に引きつづき Dean を勤めるはずで、兩人は親友だが性格はだいぶ違う。飛び歩いている Rånby と違い飛行機がきらいで、あまり外国へ出ないようである。珍しい趣味をもっている。去年の夏、彼の別荘で、罪に From the Author というサインのある古本を見せられたが、何気なく著者名を見るとそれが何と Charles Darwin とであった。放射線化学にたいへん熱心で、被照射食塩中に保存された色中心を反応開始剤に使う研究はなかなかおもしろい。カバンに入れて運べるのだと自慢のバース照射用の Microtron を Standitronix 社に試作させ、昨秋の

写真 1 シネル教授(堅田で、長井所長と筆者)

* Seizo OKAMURA 京都大学(工学部高分子化学科、606 京都市左京区吉田本町)教授・工博

ジュネーブ会議に出品したりしてなかなか積極的なところもあるが、日本に來ないかと誘っても飛行機がこわいと笑っていた。

Brohult は IVA (Royal Swedish Academy of Engineering Sciences) の總裁で、薬学や発酵に詳しい大ボスである。毎年会っているが堂々たる巨体で、ちょっと Staudinger や Melville を思い出させる。一昨年の万博では大学関係者を招待してスウェーデン館を中心に Research Day の催しがあり、Brohult も來日してスウェーデン科学の宣伝をした。IVA は大使館と協力してロンドン、パリ、ニューヨークおよびモスクワに Engineering Science Attaché を持っている。筆者の IVA 会員としての最初の仕事は、東京に同様な Attaché を置く計画への協力であったが、幸いに成功して4年前から六本木の大使館に科学技術のわかる人が常駐している。初代 Delaryd、今は2代目の Hornmark とともに化学屋である。

(4)

Uppsala 大学には Claesson が物理化学を担当して健在。ここの物理化学は Svedberg とか Siegbahn とかのりっぱな伝統があり、他にも図書館とともに見学すべき研究室も多い。Claesson の Flash Photolysis の装置など例の超遠心分離機の基礎と同じように原理的にも機械的にも全くとがっちりしたもの。スウェーデン科学の歴史の深さがしみじみと味わる。

新設の Umeo 大学には Stundsvik 原研にいた Kinell が物理化学の担任になって移った。ケネディ空港やスキポール空港など変な場所よく会う仲である。両方ともよく歩くということか。三菱油化の清水晃氏や京大大学院生の志賀哲雄氏が協同して吸着系放射線照射で生成するダイマー・イオンの ESR 研究が行なわれている。今年のフィンランドの国際高分子シンポジウムの前後に Stockholm で ESR に関するノーベル討論会があり、彼が委員長になる。

Umeo 大学の Kinell 研究室の Gillbro 助教授は学振の流動研究員として京大原子炉実験所の山岡仁史助教授の所に1年間滞在したことがあり、日本語で研究発表をして帰国したツワ者である。

(5)

スウェーデンでも南方のデンマーク寄りには比較的暖かく、言葉もデンマーク語に近いそうである。まず西海岸

写真 2 ジュメッツ教授と桜田先生

の Goteborg にある Chalmers 大学には有機化学担任の Adler がおりバルブ 随伴物質の構造決定などよい仕事が多い。東洋紡の三宅英男氏と東海バルブの久保慈八郎氏が留学され、ともに有機合成の協同研究をされた。Malmö 北方 20 km に Lund 大学があり、ここの Thermochemistry 研究室には Sunner がいる。がっちりしたボンベ・カロリメータと整った測定器械から、いかにもデータへの信頼感がわいてくる。ここには原研の中瀬吉昭氏と東洋紡の渡辺晴彦氏が滞在し、環状エーテルの熱化学をやられた。近くにミルク容器と塩ビ製ビールびんで有名な Tetra Pak AB がある。なお 100 km 北上すると Perstorp という小さい村があり、ホルマリン樹脂をつくっている Perstorp AB がある。ここには高分子の専門技術者が約 10 人もおり、(わが国の 100 人にも相当する) この集団を指導しているのが Flodin、近く産業界と兼務する Extra Professor として Rånby に協力して高分子教育にも従事する予定らしい。

(6)

ベルギー国ルバン大学の Smets は高分子有機化学として周知のとおり、IUPAC の名幹事役としても有名である。気さくな性格と親切な世話好きで外国の留学研究員も多い。

真庭をいっしょに散歩などすると、この先生のためなら何でもしたくなるから不思議である。昨年までは IUPAC の高分子部会長 Wichterle との名コンビをうたわれ、今年からは新会長 Benoit との取り合せも最上である。誰とでも合う偉い人だと感心させられる。北大の林晃一郎教授は一の弟子であり、関西ペイントの中山雅晴博士と倉レの池田耕太郎氏も Smets の薫陶を受けられた。

(つづく)